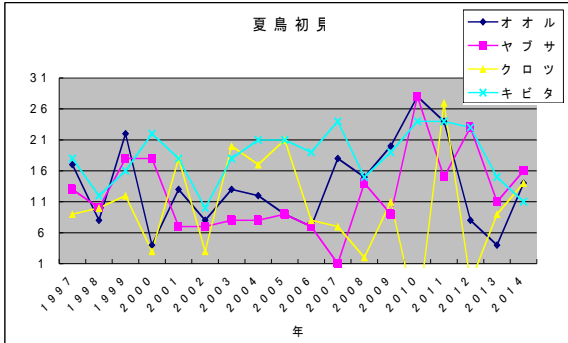


春の先頭争い

1. 打吹山へ来る夏鳥の順番

冬鳥で打吹山に遅くまで残るのはツグミの仲間のシロハラですが、日本で繁殖する夏鳥の早いものは3月下旬に渡ってきます。これらには、2つのグループがあります。一つは打吹山で繁殖する種、もう一つはさらに北方へ、あるいは山地へ移動して繁殖する種です。いずれも雄が最初に渡来してナワバリを作り、そこに雌がくるとことになるので、到着した雄はさえずりを始めます。したがって到着がよく分るのです。

鳥が季節を知るのは日照時間の長さといわれていますので、太陽の運行により毎年同じになるはずですが、右図のように



年によりかなりのずれがあります。毎朝歩いて聞いていますので、遭遇の問題より、気象の影響等がかなりあるように感じます。図のオオルリ、クロツグミ、キビタキは声も大きく分かりやすいのですが、ヤブサメは虫の鳴くような小さな声で分かりにくい鳥です。ヤブサメ、キビタキ、サンショウクイは打吹山で繁殖しますので、7月まで声を聞くことができます。“馬のいななく”のようなコマドリや、“焼酎一杯グイー”と鳴くセンダイムシクイは、20日前後の1週間くらいしか留まりません。雄が盛んにさえずる4月は、鳴き声を覚える良い時期です。

2. セントウソウ

わりと日が当たる遊歩道脇の湿り気がやや多い場所で、地面に張り付いたような株から白い小さな花がまとまり、10~20cmの花穂(複散形花序という)を数本上げるためよく目立ちます。セリ科に共通した花型ですが、セリは7月、ハナウドは5月に開花するのに先駆けて、セントウソウは4月の開花です。一番早いので先頭草というわけではないようで、名前の由来は不明です。



天皇を退位した上皇が住む仙洞御所の“仙洞”を当てる例もあります。ひっそりと陰に生育するというよりそれなりの光を好むようで、湿気のある山麓の林縁が生育地です。

セリ科に共通の3回羽状複葉で、雪解けとともに葉を展開していくとき、同じ場所にヤブニンジンが芽を出しています。開花時期になると草丈の違いがはっきりするのですが、2~3月での区別は小葉の切れ込みが細かく緑の濃いものがセントウソウです。



セリ科3種の葉
左からヤブニンジン
セントウソウ
ヤブジラミ